

福祉現場実習における学生への支援のあり方について

—福祉スーパービジョンの導入に向けて—

原田奈津子（日本社会事業大学大学院 社会福祉学研究科）

<要 旨>

本研究では、福祉を学んでいる学生を対象とし、福祉現場実習において学生が抱える諸問題を明らかにすると共に、学生への支援のあり方について検証することを目的としている。実習直後の福祉系専門学校の学生を対象に、福祉現場実習での満足度、ストレス、サポート源、及び利用者に対するイメージ等について質問紙調査を実施した。全体の結果から、ストレスと実習満足度に関連がみられた。また、福祉を学ぶことへのやりがい、福祉職に就く意向、利用者へのかかわりに関する満足度もストレスと関連していることが明らかになった。また、ストレスとイメージとの関連、サポート源活用についても実習に関して大きな意味を持つことがわかった。

実習について、モチベーションの高い学生へのサポート、またはモチベーションの低い学生へのサポートに関しても、それぞれに応じたサポートが求められている。

実習中の学生のリアリティショックに対応し、実習での疑問・問題について対応できるような実習機関での取り組み、つまり、実践的な福祉スーパービジョンの導入が望まれる。

<キーワード>

福祉現場実習、ストレス、実習満足度、サポート

【はじめに】

高齢化社会が急速に進み、介護保険制度も施行され、福祉を取り巻く現状は変化しつつある。その中で、福祉の担い手である介護者について、ストレスやバーンアウトといった問題が注目されている。また、将来を担う介護職者の人材養成が急務となっている中で、福祉従事者の養成やサポートが今後さらに重大な問題となる。学問的にも、また社会的にも福祉に関して関心が高まっていることから、介護の担い手に関する研究が望まれている。

福祉に関する人材養成及び人材確保といったマンパワーについての問題は、以前からメディ

アや福祉関連団体等のさまざまな場で取り上げられてきた。そこではまず人材不足ということが大きなテーマであった。しかしながら、近年福祉分野の学校が増えてきており、またホームヘルパー講習といった講座も盛んになってきている中で、単なる人材不足といった課題よりも、これからは福祉従事者としての専門性を持った人材の確保が、つまり質の確保が非常に重要な課題になっていると考えられる。

福祉を学ぶ学生には、介護福祉士・社会福祉士等の資格取得のためもあって、福祉現場実習が多く取り入れられている。実際の現場で学ぶ

ということが今後福祉分野で働く上での貴重な体験になることを意図している。しかしながら、福祉現場実習においてリアリティショックをうける学生が多いといわれている。その背景には教科書で学ぶこと（介護教育）と現場とのかい離という問題、受け入れる側の体制不足などといった複合連鎖の問題が指摘できる。また、実習に向けてモチベーションの高い学生へのサポート、またはモチベーションの低い学生へのサポートに関しても、それぞれに応じたサポートが求められている。

よって、本研究では、これから福祉の現場に携わるであろう現在福祉を学んでいる学生を対象とし、介護実習において学生が抱える諸問題を明らかにすると共に、学生への支援のあり方について検証していきたい。それによって、福祉職としての専門性を身に付けた質の高い人材育成に関する示唆が得られるのではないかと考える。

介護学生の福祉現場実習での満足度、ストレス、対処、及び利用者に対するイメージ、さらにこれらをふまえて、福祉スーパービジョンの取り組みに向けて検証していくことにする。

【研究方法と対象】

先行研究のレビューを行い、さらに実習について2年生へ自由記述によるプレ調査(2001年)等を実施した後で、1年生への本調査を行なった。なお、プレ調査では、実習に関する肯定的・否定的な記述を調べ、そこで実習の実施施設によって学生の満足の度合いが違ってくことや福祉職にやりがいを感じているかどうかといったことが関わっていることが浮かび上がった。

本調査では、東京都内のある福祉系専門学校に在学する学生へ質問紙調査を実施した。調査対象者として、実習直後の1年生に実施した(2002年3月)。

なお、回収したのは、実習期間の時期がずれた数名等を除いた148人である。

調査は以下の項目からなる。

①利用者イメージスケール(6項目)

「穏やかー怒りっぽい」「暖かいー冷たい」等の6項目について、利用者のイメージを検証する。「穏やかー怒りっぽい」を例にみると、「とても穏やか」が1点、「やや穏やか」が2点「どちらともいえない」が3点、「やや怒りっぽい」が4点、「とても怒りっぽい」が5点となる。他の5項目についても同様の手続きをとる。よってそれらの総和を項目数で割ったものをイメージ得点として分析に使用する。点数が低いほど、イメージは肯定的、逆に高ければイメージは否定的となる。

②パブリックヘルスリサーチセンター版ストレスチェックリスト(44項目)

3つのサブスケールからなる。

「急に息苦しくなる」「目が疲れやすい」等の一過性のストレス反応とされる特徴や慢性的な疲労を示す身体的ストレス15項目、「不安を感じる」「ゆううつで気分が落ち込む」等の心理的ストレス18項目、「毎日の暮らしの重さに圧力を感じる」「いろいろな規則が窮屈に思える」等の状況認知ストレス11項目となっている。

それぞれの項目については、「ない」(1点)、「ときどきある」(2点)、「よくある」(3点)の3件法で回答している。

③実習に関する項目

実習先施設形態、所在地、通いの形態・時間、実習での満足度、実習でのトラブルの際の対処について等実習に関する項目

④福祉を学ぶことになった要因、やりがい等の福祉一般に関する項目

⑤年齢・性別等のフェイス項目

⑥自由記述

また、本研究の枠組みを図1に示した。実習

の満足度とストレス項目を中心とした分析を実施することで、福祉現場実習を通しての学生の姿や福祉を学ぶことについての諸要素を探ることになる。

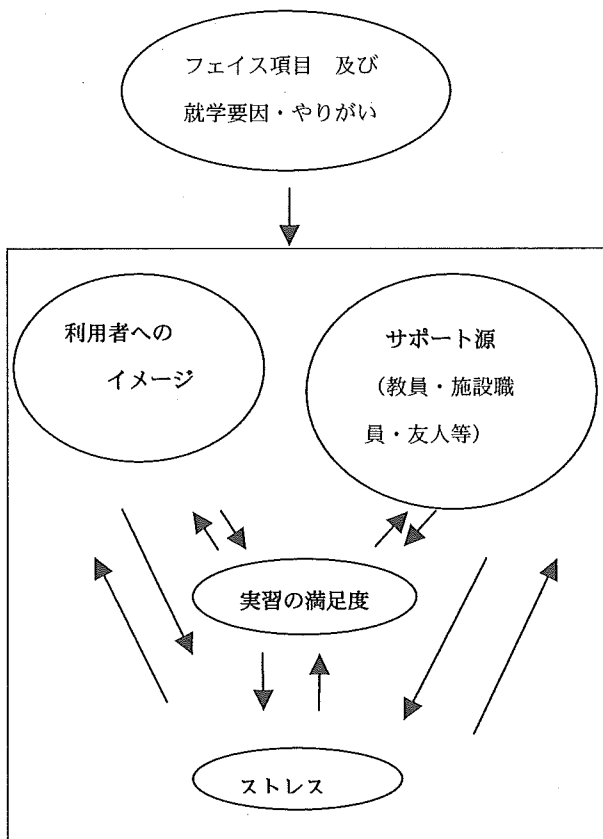


図1 本調査での中心的枠組み

【結果】

1. 基本属性

分析に用いたのは148名であり、女性が110人、男性が38人となっている(平均年齢は19.25歳)。実習施設については、特別養護老人ホームが118人と最も多く約8割となっている(その他として、老人保健施設、身体障害者療護施設等)。実習先は東京や千葉といった関東近辺であり、実習先での宿泊が20人であった。実習先までの通いの時間は、施設で宿泊のため0分の人から150分かかった人までいたが、平均62.24分であった。

「福祉を学ぶきっかけとなった最も大きな要因は何か」との問いに、最も多かったのが「福祉や介護に興味があった」(40.5%)、次に「や

りがいがありそうだった」(21.6%)、「祖父母への介護の経験」(12.8%)、「資格が取れる」(9.5%)となっていた。なお上記以外の要因として、「親や先生にすすめられたから」「なんとなく」といったことを述べる者も約1割いた。

「福祉を学ぶことについてやりがいを感じているかどうか」については、「非常に感じている」「まあまあ感じている」が約9割、「あまり感じていない」「全く感じていない」が約1割となっている。

「今後福祉の仕事に就きたいかどうか」については、「非常にそうしたい」「まあそうしたい」をあわせて約85%、「あまりそうしたくない」や「その他」として「まだわからない」「就きたくない」といった否定的な意見を持つ者も約1割強いた。

2. 尺度の内的信頼性

利用者イメージスケール、ストレスチェックリストにおけるクロンバックの信頼性係数 α を求めたところ、利用者イメージスケール $\alpha=0.7684$ 、ストレスチェックリストについては、全体 $\alpha=0.9122$ となった。ストレスチェックリストのサブスケールごとでは、身体的ストレス $\alpha=0.7830$ 、心理的ストレス $\alpha=0.8525$ 、状況認知ストレス $\alpha=0.8023$ となった。以上により、本調査における内的信頼性が確認された。

3. ストレスに関する分析

本調査に関する結果について、ストレスを軸に結果をみていくことにする。ストレスについてより細かく検証するため、ストレスチェックリストのサブスケールである3つそれぞれを使って本研究では分析していく。

まず、ストレスチェックリストについては、身体的ストレス、心理的ストレス、状況認知ストレス、それぞれの総和を項目数で割ったものを使用する。なお、平均については、以下のとおりである($n=148$)。また、男女や年齢でのストレス得点での有意差はみられなかった。

表1 各ストレス平均値及び標準偏差

身体的ストレス	…1.67 (0.34)
心理的ストレス	…1.84 (0.39)
状況認知ストレス	…1.72 (0.42)

表2では、利用者イメージ尺度の結果をもとに、平均点(2.27,標準偏差0.61)を境にして、点数の高い群つまりイメージがネガティブな群と、点数の低い群つまりイメージがポジティブな群にわけ、それぞれの各ストレス平均値及びt値についての結果を示している。

心理的ストレスについて、利用者イメージが有意なことを示している。利用者に対してネガティブなイメージを持っている群はストレス得点が1.91点と、ポジティブなイメージ群の1.78点に比べて0.13点高くなっている。

また、有意差がみられなかった身体的ストレス、状況認知ストレスについても、利用者へのネガティブなイメージ群の方がストレス得点が高くなっていることがわかる。

表2 利用者イメージ別にみた各ストレス平均値及びt値

	身体的 ストレス	心理的 ストレス	状況認知 ストレス
ポジティブ イメージ群 (n=77)	1.62 (0.33)	1.78 (0.40)	1.69 (0.40)
ネガティブ イメージ群 (n=71)	1.71 (0.35)	1.91 (0.38)	1.75 (0.43)
t値	1.51	2.06*	0.89

注:()は標準偏差

*p<0.05、**p<0.01

続いて、実習満足度を平均(1.97 標準偏差0.74)から高・低に分け、表3にあるようにそれぞれの各ストレス平均及びt値を求めた。なお、2群に分ける際の基準として、平均だけでなく、満足度に関する「まあ満足」との回答を高群に入れるかどうか検討したところ、自由記述より不満要素が記入してあるケースが多かったこともあり、表3の分析になった。

分析の結果、心理的ストレス及び状況認知ストレスにおいて実習満足度との有意差がみられた。どちらも満足度の高い群に比べて、低い群はストレス得点が高くなっている。心理的ストレスでは0.21点、状況認知ストレスでは0.22点の点差がみられる。

表3 実習満足度別にみた各ストレス平均値及びt値

	身体的 ストレス	心理的 ストレス	状況認知 ストレス
高群 (n=39)	1.57 (0.37)	1.69 (0.40)	1.56 (0.39)
低群 (n=109)	1.70 (0.33)	1.90 (0.38)	1.78 (0.41)
t値	1.92	2.83**	2.93**

注:()は標準偏差

*p<0.05、**p<0.01

続いて上記の利用者イメージ、実習満足度以外についての関連を探るため、相関係数を求めたところ、心理的ストレスに関しての有意な関連が目立った。表4に記した。なお、身体的ストレスに関しては主に有意な相関はみられなかった。状況認知について有意差がみられたものとして(p<0.05)、「福祉職に就く意向」(r=0.346)、「やりがい」(r=0.286)に正の弱い相関があった。

心理的ストレスに関しては、表4にあるように「福祉職につく意向」(r=0.393, p<0.05)、「や

りがい」(r=0.319, p<0.01)、「利用者とのかかわり」(r=0.270, p<0.01)とそれぞれ正の弱い相関が示された。年齢と就学要因についてはそれぞれほとんど相関がみられなかった。

表4 相関係数(心理的ストレス関連)

	心理的ストレス
年齢	-0.164*
福祉職に就く意向	0.393*
就学要因	0.185*
やりがい	0.319**
利用者とのかかわり	0.270**

* p<0.05 ** p<0.01

また、実習先で困ったことやわからないことがあったときの対処行動としての「対人サポート」との関連について検証したところ、身体的ストレスとの関連では、「同時に同じ施設で実習していた人に相談した」(r=-0.210, p<0.05)の項目で負の弱い相関がみられた。また、状況認知ストレスとの関連で、「学校外の友人・知人に相談した」(r=0.252, p<0.01)の項目で正の弱い相関がみられた。

「実習先の施設職員(寮母等)に相談した」については、心理的ストレス及び状況認知ストレスに関して、有意差があらわれた。心理的ストレスにおいてはr=-0.190(p<0.01)、状況認知ストレスにおいてはr=-0.163(p<0.01)となり、数値的にはほとんど相関がないといえるが、対人サポートに関する自由記述においては、実習先の施設職員の対応ということが非常に重要であることが示唆されている。

次に、各ストレス尺度をそれぞれ従属変数と

し、その他の項目を説明変数とした5%水準をめでにした変数増減法による重回帰分析を行なった。表5にまとめて記入した。

身体的ストレスでは有意な説明項目はなかったが、心理的ストレス及び状況認知ストレスに関して共に、「福祉職に就く意向があるかどうか」が説明要素として示された。また、状況認知ストレスについては、「利用者への援助がうまくできたかどうか」が説明要素として示された。

表5 重回帰分析(ストレス各項目)での標準回帰係数

	身体的 ストレス	心理的 ストレス	状況認知 ストレス
福祉職に就く意向	n. s.	0.270**	0.283**
利用者援助	n. s.	n. s.	0.248**
通い時間	n. s.	0.159*	n. s.
重相関係数	0.246	0.421	0.481
決定係数	0.060	0.178	0.232

*p<0.05 ** p<0.01

3. 実習満足度に関する分析

続いて、実習満足度を中心に調査結果をみていくことにする。ストレスとの関連については、前述のストレスの分析において満足度高・低別に3つのサブスケールごとに平均点について検討した。よってここでは他の要素との関連を見ていく。ストレス以外の要素について、有意な要素を表6に示す。

表6にあるように、「イメージ」(r=0.210, p<0.05)、「福祉職に就く意向」(r=0.250, p<0.01)、「やりがい」(r=0.259, p<0.01)、「利用者とのかかわり」(r=0.248, p<0.01)につい

て、正の弱い相関がみられた。

また、「対処」全体 ($r=0.166$, $p<0.05$) については、ほとんど相関がみられなかった。

表6 相関係数 (実習満足度関連)

	実習満足度
イメージ	0.210*
福祉職に就く意向	0.250**
対処	0.166*
やりがい	0.259**
利用者とのかかわり	0.248**

* $p<0.05$ ** $p<0.01$

実習満足度については、自由記述で「施設職員とのかかわり」「実習施設 (場所や雰囲気等) について」「自分の知識や技術」「その他」として、それぞれ記入してもらった。

主な傾向として、実習に関しての満足度が低い人の記述の中で、「施設の職員の指示が人によって違う」「実習生を邪魔な存在としてみなしていた気がする」等の実習施設やその施設の職員に対する不信感や不満が挙げられていた。また、逆に満足度の高い人の記述には、「職員の方に親切に教えていただいた」「多様な職種の職員の連携がとれていて勉強になった」「施設環境が整っていた」等の記述も多くみられた。しかしながら、満足度の高い人の中にも、「職員の状態には不満もあったが、自分はそうならないように今後につなげていきたい」という記述もみられた。

【考察】

今回の調査により、まずストレスについては、利用者に対しては、ネガティブなイメージを持

っている人は、ポジティブなイメージを持っている人に比べて、心理的ストレス得点は高い傾向がみてとれた。また、実習満足度との関連では、実習満足度の高い人に比べて、実習満足度の低い人は、心理的ストレス及び状況認知ストレスの各得点が高くなることが示唆された。さらに心理的ストレスと利用者とのかかわりにおいて、有意な正の相関が弱いながらも示された、つまり、心理的ストレスが高いことと利用者とのかかわりがうまくいかなかったということとの関連が見られたことになる。

つまり、実習を通して、うまくいったという満足感を得られなかったり、利用者とのかかわりがうまくいかなかったことで、ストレス、特に心理的なストレスが強くなっていることが考えられる。

その他にも、「福祉職に就く意向」つまり今後福祉職につきたいかどうかということや、「やりがい」、福祉を学ぶことに関してやりがいを感じているかについて、それぞれ心理的ストレスとの関連が見られたことから、福祉職に興味を持ち得ない、またやりがいを感じられずにいる人は、心理的なストレスを抱えていることがわかった。

対処について、主に対人面でのサポート、つまり実習で何か困ったことやわからないことがあったとき誰に相談したかということをつたねたところ、身体的ストレスでは、「同時に同じ施設で実習している人」に相談したとの関連がみられた。これは同時に実習している仲間と相談しあうことによって、実習中を有意義に過ごすことができることを示唆している。が、一方で自由記述にあった「同期の気のあわない人との実習で疲れた」のように、同じ実習先で過ごす相手によっては、かえってストレスになりうることも問題として挙げられる。このことは、「学校外の友人・知人」に相談したという項目に関して、状況認知ストレスとの正の関連、つまり、状況認知ストレスが高くなることから示唆される。つまり、福祉に関連の薄い人へ実習に関

する相談をすることから、実習先での何らかの行きづまりの背景があり、実習先で相談できなかったのではないかと推察される。

また、統計的には関連は薄い結果であったが、「実習先の施設職員（寮母等）」に相談した人に関して、心理的ストレス及び状況認知ストレスにおいて、負の相関がみられた。つまり、実習先の職員に対して、実習について相談をしたり、質問をしたりする等コミュニケーションを図ることによって、関係がうまくいけば、ストレスが軽減されることを示唆しているように思う。

ストレスに対しての重回帰分析から、心理的ストレス及び状況認知ストレス共に、「福祉職に就く意向」が説明要素として示唆されたが、これは、今後福祉職に就くことをあまり希望していない人にとっては、ストレスが高まっている状態を示しているといえる。

実習満足度について詳しく結果をみていくと、ストレスの他に、「利用者へのイメージ」「福祉職に就く意向」「やりがい」「利用者とのかかわり」が関連要素として示唆された。つまり、利用者へのイメージがネガティブな人、福祉職に就くことをあまり望んでいない人、福祉を学ぶことに関してやりがいを感じられない人、実習中に利用者とのかかわりがうまく行かなかった人は、実習満足度が低くなることが明らかになった。つまり、実習中の何かしらうまくいかなかったことがあったり、福祉を学ぶことへのモチベーションが低かったりといったことがあると実習に関する満足度は低くなってしまふことが示唆される。

実習に関して結果でも述べたように、満足度の低い人の記述の中で、実習施設や施設職員の実習指導のあり方に関する不信感や不満が述べられているケースが多かった。また、満足度の高い人の中にも、利用者とのかかわりや今まで学んだことをいかせたという自分の中での達成感が得られたが、実習施設の職員とのやりとりがうまくいかなかったとするケースもあった。

上記とは反対に、「職員の指導がわかりやす

かった」「尊敬できる職員に出会えた」「施設全体の連携がとれていた」等といった実習施設やその施設の職員によって、有意義な実習になったという実感、またそれらを今後にかかしていく貴重な体験として受け止めている記述も満足度が高い人の中に多くみられた。

全体の結果から、心理的・状況認知ストレスと実習満足度に関連がみられた。また、福祉を学ぶことへのやりがい、福祉職に就く意向、利用者へのかかわりに関する満足度も心理的ストレスと関連していることが明らかになった。また、ストレスとイメージとの関連、サポート源活用についても実習に関して大きな意味を持つことがわかった。

【まとめ】

今回の調査において、「福祉を学ぶきっかけとなった最も大きな要因は何か」との問いに、「福祉や介護に興味があった」や「やりがいがありそうだった」、「祖父母への介護の経験」、「資格が取れる」というような福祉に関する何らかの興味を持ち、福祉職に就くという目的意識をもって学び始めた人が大部分を占めた。一方、上記のような要因以外に、「親や先生にすすめられたから」「なんとなく」といったことを述べる人もいるのが現状である。

今後、福祉を学ぶ学生に対して、個々にあわせた実習でのサポート及び実習課題設定がますます重要になるように思われる。

福祉現場実習が、単に資格取得のための場であるというだけでなく、今後の専門家としての専門性を磨く場となるように意義あるものになるような体制づくりが求められている。自由記述でも「施設によって実習内容が違ってくる」「実習先の施設職員が忙しそうでコミュニケーションがとりづらかった」「実習生を迷惑だと思っているのではないか」といった記述が目立った。そういう記述がある一方で「職員の方に丁寧に指導していただけた」「実習先の施設のようなところで働きたい」といった記述もあり、実習

先によって、実習内容に差が出てくることが示唆された。

実習中の学生のリアリティショックに対応したり、実習でわいてきた疑問・問題といったことを相談できたりといったことに対応できるような実習機関での取り組みが望まれている。

実習前後での学生の不安や問題等に対応できるような実践的な福祉スーパービジョンの導入も望まれる。福祉スーパービジョンとは、専門的に優れた援助者（スーパーバイザー）が、初心者や問題を抱えた援助者（スーパーバイジー）の職務能力向上のために行う援助であり、専門家としての知識・技術を磨くと共に、一個人として、自己成長を図ることを目的としている。一種のカウンセリングのようなものであるとされている。つまり、スーパービジョンは、福祉従事者の援助技術と自己成長をより高めるものであり、困難な仕事における適切な処理能力を身につけるための教育の場ともなる。

よって、これを学生の実習の場面にあてはめ、施設職員等がスーパーバイザーとなり、学生がスーパーバイジーとして、実習中に抱えた問題についてスーパービジョンの場を設定し、取り組んでいくことになる。

こういった実習中の学生への取り組みは、学校を中心に取り入れられてきているが、福祉施設での実施はばらつきが多いのが現状である。

今後は、受け入れる側の施設の取り組みも普遍化されていくことが望まれる。

これからの専門性を備えた質の高い人材を育成する上でも、学生への実習の際のサポートとして、福祉スーパービジョンの実施が不可欠になっていくように思われる。

参考文献

原田奈津子 2001「高齢者福祉施設職員を取り巻く現状と課題—福祉スーパービジョンの発展にむけて—」 社会福祉論叢 日本社会事

業大学院博士後期課程論文集 83-97

児玉桂子 原田奈津子 他 2001 第8章

「痴呆性高齢者への環境配慮と職員のストレス」 93-102 『痴呆性高齢者環境配慮尺度

（住宅版・施設版）の開発と有効性に関する長期的評価研究』（児玉桂子研究代表）報告書

宮堀真澄・鈴木桂子 2000「介護福祉実習における学生の不安の実態—介護福祉実習Ⅱにおける学生の不安の変化」 介護福祉学 7(1)

117-124

宗像恒次・川野雅資 編著 1994『高齢社会のメンタルヘルス』金剛出版

中根真 2001「社会福祉専門教育の諸問題とその課題（その1）—社会福祉援助技術演習に焦点をあてて—」 関西福祉大学研究紀要 (3)

75-102

日本社会福祉士会ニュース No.56 2001

「実習指導養成研究会の意義と今後の展開」

1-5

Steve Morgan 1996 *Helping Relationships in Mental Health* Chapman&Hall

田尾雅夫 1996『ヒューマン・サービスの組織』法律文化社

堤雅恵 2000「ケース担当実習における介護過程の展開の分析と実習指導上の課題」 介護福祉学 7(1) 36-43

山野理恵 1997「社会福祉現場実習における体験場面とスーパービジョンセッションの設定—スーパーバイザーによって用いられるスーパービジョン行動—」 『ソーシャルワーク研究』 22(4) 73-81

全国社会福祉協議会

1996『社会福祉施設職員の現状と採用に関する調査結果からみた傾向』